

認知不能の恐怖 (Fear of Agnosia)

—— 人種記号 (レイス・マーカー) とトニ・モリスンの「レシタティブ」

荒 このみ

1 記号と表象

記号論の創始者チャールズ・S・パースは、「われわれは記号によつてのみ思考する」と主張した。記号とは言葉やイメージ・音・におい・味・行為・物などによつて表象されるのだが、それらの表象物そのものに本来的な意味はない。そこに意味を付与するのは私たち人間であり、その解釈(意味付与)によつて記号は生まれる。あらゆるものが記号になりうるのだが、意味付与をしないかぎりはあらゆるものが記号にはなり得ず、思考する質と幅は広がらない。「記号として解釈されないかぎり、なにももの記号ではない」とパースは言う。記号とは何ものかを指示し、あるいは何ものかを代替表示・表象するのであるが、そのように意味するものとして私たちが「解釈する」ときに、それは初めて記号になる。

トニ・モリスンのただ一つの短編作品「レシタティブ」は、記号の解釈というテーマを追求した作品として読むことができる。このきわめてアメリカ社会を象徴的に映し出す作品において、モリスンは社会記号によつて前提される表象のありかたを問うているのであり、アメリカ社会における表象のポリティクスを描き出している。

人種記号(レイス・マーカー、レイス・コード)がアメリカ社会では社会的記号として日常的に作用している。意味付与された人種記号は、人種的「自己(セルフ)」と「他者」の間に動的な関係性を生み出す。すなわち表象のポリティクスであり、それは必ずしも白人と黒人を差異化したときに生じてくる人種記号だけではなく、黄色人種のアジア人や先住民インディアンと白人との対照による差異化でもあるのだが、その中でも白人との対照における黒人の人種記号が、アメリカ社会では意味を持つている。それはアメリカの歴史とかかわる社会記号だからであり、モリスンが問題にするのは白人と黒人を対照する人種記号である。奴隷制度という歴史的背景を持つその人種記号が、今日にいたるまで何にもましてアメリカ人のメンタリティを形成していることは否定できない。

2 トワイラとロバータ

「レシタティブ」は、二人の主人公——語り手のトワイラ(後にジェイムズ・ベンスン夫人)とロバータ・フィスク(後のケネス・ノートン夫人)——が、八歳のときに孤児院に入れられ同

室になったときの出来事から語り始められる。時代は二〇世紀後半で、二人が四七、八歳になるまでおよそ四〇年間にわたって物語は展開していく。

二人は「塩と胡椒（白と黒）」（158）と形容され、物語の半ばでは、「黒人の少女と白人の少女がハワード・ジョンソンで出会う」（165）と二人の人種的背景が明らかにされている。それでも最後までどちらがどちらの人種であるのかは明示されることがない。読者に判断は任されているのであり、これまでこの作品を論じて、どちらが白人か、どちらが黒人かという推測と分析がなされてきた。大多数がロバータを黒人とみなし、トワイラを白人と見なすことで納得されている。その謎解きがこの作品の面白みであり、同時に解読不能の苛立ちの原因になっているが、もちろん作者は謎解きを読者に求めているのではない。

けれどもここで大多数がロバータを黒人とみなし、トワイラを白人と見なしているという読者側の事実注目しなければならぬ。作者は人種記号の混交と混乱を意図しながら、なおかつ人種記号が生きているアメリカ社会の現実を消去することに成功したのではない。またその消去を意図しているのでもない。作者は人種記号が生きている現実そのものを問題にしているのであって、人種記号の具体化の解釈を問題にしているのではないのである。作者にとってはどちらの登場人物が白人であつても黒人であつてもかまわない。その状況を突きつけられた読者の、そしてアメリカ社会の戸惑いがこの作品で俎上にのせられている。その戸惑いこそアメリカ社会の「認知不能の恐怖」である。

トニ・モリスンの混交と混乱の方法のひとつは、これまで黒人の人種記号とされてきた言語上および社会習慣上の記号を、相反する人種であるはずの二人に、それぞれ付与していることである。たとえば最初の部分で、トワイラは孤児院に半日早く到着していたロバータとその人種的背景に関して次のように述べている。「母さんがいうには、あの人たちは髪の毛を洗わないし、それに変なおいがする。じっさいロバータは変なおいがした」（157）。

「変なおいがする」という人種記号は、一般に黒人を表象するときに使われる。すると物語のほとんど最初からロバータが黒人だろうと読者は推定するように導かれるのである。いっぽうトワイラの母親がダンス狂いということが、物語の冒頭の文章で語られている。「わたしの母親は一晚中踊っている」（157）。音楽や踊りのリズムが特に秀でていた民族集団として諒解されているのはアフリカ人であり、その子孫であるアメリカの黒人である。それではトワイラの母親が黒人となるのであろうか。

いかなる物語においても最初のセンテンスは常に印象的であり、より強い意味合いが込められることを考えると、トワイラの母親に付与された人種記号は全面的に強調されながらこの物語が繰り広げられていくことになる。すでに物語の始まりの部分から、このように二人の人種記号の付与に関して混交と混乱が意図されている。

体臭が強いという生理的な偏見は社会習慣的な諒解としてあり、もともとアフリカ人であるアメリカの黒人は先天的・民族的にリズム感がよく、踊りがうまいということも、体臭ほど

には黒人に限定されないが歴史的に諒解されている。したがってこのような形容を作者が取り入れたときには、すでにアメリカ社会の諒解事項としてこれらの人種記号が存在していることを読者は知識として持つている。トニ・モリスンが初めて創り出した記号ではなく、歴史的根拠のある人種記号として認識されているのである。

その歴史的根拠の一つは、トマス・ジェファアースンの『ヴァージニア州覚書』(一七八五)である。ジェファアースンはこの中で、黒人はいやなおいがすると記している。

「かれらは腎臓の分泌物が少なく、皮下腺からより多く分泌するので、強烈で耐えがたいにおいを発散する」(146)と、あたかも生物学的な相違が白人と黒人のおいの発散の違いを生み出しているかのような記述である。かれらにはリズム感があり、踊りが好きで遊び好きという特徴も、『ヴァージニア覚書』の中にある。「かれらは一般的に白人よりずっと音楽の才能があり、メロディ、拍子の取り方が正確である」(147)。

ジェファアースンのような偉大なる指導者の見解は、そのまま真実として受容される傾向があり、その黒人観の影響が広汎におよんだことは否定できない。

もう一つの歴史的記述の証拠を挙げておこう。

一八世紀の代表的なスレイヴ・ナラティブである『オラウーディ・エクイアーノの人生の興味深い物語』(一七八九)の中に、かれらのリズム感、踊りのうまさへの言及がある。アフリカのゴニアに生まれたオラウーディ・エクイアーノは、そのナラティブの最初の章で自分の部族に伝わる結婚の儀式について描写している。儀式のあとに続く祝宴では、ボンファイアが

焚かれ、人々は歓喜の声に包まれるが、そのときには音楽と踊りがかならず披露される。「わたしたちは踊り手でありミュージシャンで、しかも詩人なのです。(略)戦いに勝利したときのような大きな出来事があった折には、部族を挙げてめでたい歌と音楽、踊りを披露して祝うのです」(36)。

さらにミンストレル・ショウの伝統を挙げることができる。

一八三〇年前後に成立したとされるミンストレル・ショウは、一九世紀のアメリカ社会において人々の娯楽の大きな部分を占めていた。特に一九世紀後半のすでに奴隷制度が廃止され、南部の大農園の暮らしがもはや過去のものとなったときに、かえって南部の暮らしに郷愁の念を抱きながら振りかえるミンストレル・ショウは、白人観客から好評を得たのだった。白人ヴォードヴィルや、『アンクル・トムの小屋』のさわりの部分を演じる芝居もミンストレル・ショウの出し物として大評判になったが、とりわけ白人が顔を黒塗りにするブラック・フェイスは、ミンストレル・ショウと同義語になるほど、一九世紀アメリカ社会の娯楽として認知された。そしてそのミンストレル・ショウの影響を受けている一九世紀の作家ハーマン・メルヴィルの『ベニート・セレーノ』の中でもまた、黒人奴隷が原色の衣類を好み、カスタネットや歌を好むことが強調されている。

ミンストレル・ショウのブラック・フェイスが演じるのは、奴隷時代の南部の愚かな黒人の姿であり、その喋りかたであり、歌であり踊りである。黒人には生まれつき芸能の才能があるという前提はすでに当然の諒解事項になっていった。焼きコルクを練り上げたクリームを顔に塗り、ブラック・フェイスに

なつて黒人に扮した白人の芸能人は、必死になつて黒人の踊りや歌を真似ようとした。

二〇世紀のスーパースター、エルヴィス・プレスリーが黒人音楽の影響を受けていたことは、すでに多くの間での諒解事項である。「レシタティブ」の中では六〇年代半ばに爆発的な人気を博したアフリカン・アメリカンの歌手ジミ・ヘンドリックスへの言及があり、黒人音楽への圧倒的な支持は物語の展開において強調されている。

3 人種記号

社会的に認知された人種記号をこの作品の中に拾っていくと数かぎりなく発見され、トニ・モリスンがかなり意図的に、そして強引に人種記号を織り込んで物語を進めていったことがわかってくる。

たとえばオープン・スクールの日に、孤児院へやって来たトワイラの母親の服装は、「あの緑色のスラックスをはいていた」(160)と描かれ、「あの緑色」という表現ですでに一つの諒解があることが前提にされる。つづけて「みっともない緑色のスラックスをはいたお尻がぐつと突き出ていた」(160)と描かれ、読者はここで黒人の女たちが好んで着る原色の赤や緑の衣服を想像し、「お尻がぐつと突き出ていた」という説明に、かつて一九世紀に開催された博覧会で紹介された、尻の突き出たホッテントット・ヴィーナスにつながる黒人の体型を想起する。このように何気ない描写に人種記号が隠されている。

あるいは二人の少女の母親が初めて出会ったときに、トワイラの母親が取った行動の姿勢に人種記号が読み取れる。ロバータの母親に無視されたトワイラの母親は、何が起きているのかすぐには理解できずに、「にやにや笑っていた」(161)のである。これは白人の主人の前で理不尽に扱われる黒人奴隷が、にやにや笑つて自分の感情を隠し、抵抗の心を抑えて、あたかも従順であるような振りをしたその伝統につながるだろう。「アメリカの黒人」たちは、「シグニファイイング」という動作で「馬鹿の振り」をし、ピントはずれの応答をして愚かな黒人像を植えつけ、白人の怒りを買わずに自分の感情をずらし込む術を身につけていたのであった。

このような人種記号の氾濫の無意味化を狙う作者は、物語の展開の中でマギーという台所働きを登場させる。

「括弧のような形」と形容されたマギーの脚はがに股で、体を揺らしながら歩くのだが、その風情は外反母趾がより多いとされる黒人の特徴と見なすことができるだろう。黒人の人種記号として確定することはできないが、がに股も体を揺らしながら歩く特徴も少なくとも黒人にありがちな現象として理解される。そしてマギーは滑稽な帽子を被っている。自分の好みではなく、そもそも自分の好みなどおそらく持たないマギーは、貰い物かお下がりのような耳当てのついた子供用の小さな帽子を頭に乗せている。台所働きのマギーはバス通勤をしており、夕方になるとバスに乗り遅れまいとして森の中の近道を必死になつてよたよたとバス停へ向かう。この何気ない描写が実は人種記号であり、バスの利用者には黒人が多いことを読者は想起する。

マギーの肌の色は「薄茶色」と明記されているので、そこから当然、マギーは黒人であると判断しても構わないのだろう。だがそれは肌の色という事実によつて、表象である人種記号を攪乱させる効果を生み出している。「薄茶色」であってもメキシカンであったりプエルトリカンの可能性がある。すなわちここでは肌の色という明らかな現実ですら、白人か黒人かという判断基準にはならないという例証になっている。肌の色では判断できない「アメリカの黒人」の区別を、それではどこに求めたらいいのか。

マギーの事件は、二人の登場人物のトラウマになつて物語の最後まで続く。実際にマギーは黒人だったのかという解決不能の問いに悩まされ、マギーを突き倒したのはトワイラなのかという疑問がマギーの人種背景と絡まつて二人に取りついて離れない。黒人だから突き倒したのか、黒人だから手助けをせず黙って見ていたのではないか。黒人だから一緒になつて突き倒したいという衝動が自分の中にもあつたのではないか。マギーの事件に関する証言と衝動の記憶の不確かさが二人を結びつけていく。そのように考えると、「ああトワイラだったら、ああいやだ、いやだ、いやだ、いったいマギーに何が起こつたの」(172) という結末のロバータの叫びと苛立ちが、この作品解釈の鍵になつていとみなすことができる。

ロバータの最後の嘆きは、証言と衝動の記憶の不確かさに対するものであり、結局のところ人種記号は確定されないのに、それでも社会的に容認された人種記号によつて私たちが勝手な解釈をしてしまうことへの苛立ちである。マギーの事件は、マギーが口がきけず、もしかしたら耳も聞こえないという設定

によつて、黒人の人種記号が付与されていると考えることができる。その体型や身振りの不恰好であることのみならず、マギーが何も喋ることができないという沈黙の人生を送つているところに、「アメリカの黒人」の沈黙を強いられた歴史が重ねられる。

するとマギーの事件は南部でしばしば起きていた黒人の男を対象とするリンチ事件の変形となつてくる。黒人も混じつた白人の孤児の集団によつてマギーは突き倒されるのだが、周囲の人間はマギーを救済する術がなく、その意志もない。トワイラとロバータが遠巻きに眺めていたように、ただ傍観するのみである。マギーの出来事が象徴しているのは、「アメリカの黒人」が置かれているアメリカの人種差別の状況であつた。

「いったいマギーに何が起こつたの」というロバータの叫びは、リンチに遭い、沈黙を強いられてきた「アメリカの黒人」にいったい何が起こつたのかという悲痛な叫びになつて聞こえてくる。「アメリカの黒人」の歴史、抑圧やリンチの歴史をわたしたちは十分に知らされていないし、わたしたちの記憶の中で曖昧になつている。そのどうしようもない苛立ちをロバータは物語の最後の場面で発したのである。

解明不可能な人種的要因を含んだ過去の出来事や解明不可能な人種的背景への問いかけが、この作品によつて作者が実験したことであるのだとすれば、少なくともこの作品はアメリカ社会の抱えるアポリアを突き、その問題提起をして読者に考えさせようとしている点で成功している。

4 人種とは何か

トニ・モリスンはなぜ人種記号にそれほどこだわらなければならなかったのか。繰り返すが、アメリカ社会の歴史的特殊性のゆえである。それでは人種とは何なのか。何を表象しているのか。

かつて生物学的分類のカテゴリとしてさまざまな人種が「考案」され、人間の身体的差異の科学的根拠とされてきた。ところが各人種に分類されたとたんにその分類の曖昧性が問題になった。デイヴィッド・シオ・ゴールドバーグによれば、人種という概念がヨーロッパの言語表現に見出されるのは一五世紀であり、科学的用語として、また一般の人々によって頻繁に使用されるようになったのは、一八・一九世紀である(『人種主義の解剖』、295)。また『人種——アメリカにおける概念の歴史』(一九六三)の著者トマス・F・ゴセットは、「人種理論」がヨーロッパ人の思考の中に明確に入り込んでくるのは、そう古いことではないという(16-17)(『人種主義の解剖』、61)。人種(レイス)という語源も明確ではなく、人種が重要な分類単位になり特定集団化を促す役割を果たすようになったが、その経緯も明白ではないとルシアス・アウトロウはいう(『人種主義の解剖』、62)。人種(レイス)という英語が最初に記録されたのは、一五〇八年のウイリアム・ダンバーの詩で、その後、三世紀にわたって頻繁に使用されるようになり、一九・二〇世紀になると生物学的な差異をあらわす用語になっていった(マイケル・バントン、ジョン・ササン・ハーウッド共著『人種概念』、13)。

このように数人の研究者による記述を見ても、人種概念がそ

れほど古くない過去に生み出されたことがわかる。ボードリヤールは『象徴交換と死』(今村・塚原訳、筑摩書房、一九八二)で、一六世紀にブラジルの人食い人種を訪ねたジュネーヴ出身のピューリタン、ジャン・ド・レリによる『ブラジルへの旅』を紹介しているが、この人物はこの時点で人種主義者ではなかったことを指摘している。そして人種主義は近代のものであると述べている(267)。人種という用語が発生した時代が、ヨーロッパ近代主義の展開のなかでアフリカやアジアの植民地化へ向かったことを忘れてはならない。それは人種・人種主義が差別的用法に変換していく時代であった。

一五世紀になって新世界が「発見」され、すなわちこれまでヨーロッパ人に認識されていなかった地球上の島々や大陸の存在を初めて認識するようになった。そこに住む自分たちとは明らかに異なる先住民「インディオ」と接触しなければならぬ状況になって、ヨーロッパ人の認識の中にかれらをいかに「定義」し、その思考体系のなかでどのように位置づけるかという戸惑いが生まれたのである。インドや中国は、ヨーロッパ人の想像力のなかでまだ地の果てにあり、人種の差異化を問題にするまでもなかった。だが一五世紀以降、新世界と遭遇し接触を続けるなかで、新世界の住人「インディオ」の異質性を意識するようになった時点から人種主義が発生したのであった。

「インディオ」だけではなく、労働力として大幅に依存するようになったアフリカ大陸から連れて来られた奴隷たちとの身近な共生が、「人種理論」についての思考を促すことになった。かれらとの接触と共生を体験するようになったアメリカ植民地のヨーロッパ人は、異なる人種の存在によってその思考と

感情が左右されることになる。

けれども新世界のアメリカ植民地時代から一八世紀後半のアメリカ合衆国の創生期にいたるまでは、ヨーロッパからの植民者による圧倒的な階級制度と支配体制のなかで人種主義はほとんど問題にならなかった。人種主義が問題になってくるのは、その対象となる「他者」の存在が、支配階級の頭痛の種になるほど身体的・精神的領域において競合するようになってからである。

このように人種概念や人種主義は必然的に植民地主義と政治的に絡んでいったのである。人種分類が植民地化の過程で人種主義を生み出していったことに、今日の社会が抱える問題がある。その結果、今日、人種は生物学的のみならず、政治的・社会的階級制度と結びついて理解されるようになった。そしておのずから人種という差異化が生物学的であるにとどまらず、優劣を伴う人種主義になっていったことに今日のアメリカ社会が抱えるアポリアが生じたのである。

二〇世紀の半ば以降に活躍し、一九六五年に暗殺された革命的人道主義者マルコムXは、「ネイション・オブ・イスラム」とかかわっていたブラック・ナショナリズムの時代には、人種を「社会的に構築されたもの、あるいは歴史的な現象とは見なさず、生物学的現実である」と考えていた（パトリシア・ヒル・コリンズ『わたしたちのマルコムX像』、61-62、『ブラックの公的領域』²⁷³）。自分自身は赤みがかった茶色の肌で、外で日に焼いてもっと黒くなってきなさいと子供のころ母親に命じられたというが、真黒い肌が正統とされるブラック・ナショ

ナリズムでは、黒い肌であるからこそ自分たちのアイデンティティが証明されるという考えかたであった。

それはアメリカ社会の特殊な事情による人種概念の変形といえる。白人支配階級による極度の抑圧状態を体験したかれらは、根源的な身体的証拠から自分たち自身の存在証明を試みようとしたのである。それこそが揺るぎない基盤になるという主張であった。けれどもこのようなエッセンシャルイズムの解釈は破綻へ向かわざるをえない。特にアメリカ社会では黒い肌ではない、薄い肌の色の「アメリカの黒人」こそが人種概念の矛盾を背負っていたからである。「ネイション・オブ・イスラム」と決別したマルコムXは、アフリカ訪問のさいに「白いイスラム教徒」に出会い、その考えかたを一八〇度転換するのだが、その思想の変遷を十分に表明しないままに突如として暗殺という悲劇で人生の終幕を迎えてしまった。

現代の「ブラック・カルチャー」は「階級文化」であるというのは、ポール・ギルロイである。今日のアメリカの文化現象に照らしてもそれは当てはまるところがあり、その端的な例証をラップ音楽に見出すことができる。たしかに「アメリカの黒人」を、アメリカ社会に占める経済的地位という階級（クラス）によつて分類し、かれらの差異を解釈することは可能である。それは白人支配体制の歴史から、階級と人種が結びつきやすかったからである。じっさいにトニ・モリスンの「レシタティフ」では、物語の半ばから人種記号と階級記号が入り混じって二人の登場人物を形容している。あるいは一つの記号が人種記号であり同時に階級記号になっている。

たとえば「レシタティブ」のマギーの存在に対する対応が、二人の主人公ロバータとトワイラではまったく違っていた。ロバータはマギーを黒人であろうと考えていたのだが、トワイラにとってマギーは「人種化」されていなかったとエリザベス・エイベルは主張する。人種意識が欠落していることは、すなわちトワイラはマギーを白人と見ていたからである（フルツの注の引用、¹¹⁴）。けれどもロバータに指摘されたあと、トワイラにとってもこの事件が意味を持つようになる。マギーがたとえ「人種化」されていなかったにしろ「階級化（クラス）」されていたからであり、それをトワイラは感じ取っていた。その風貌・台所働き・バス通勤・自己表現をしないというマギーの特徴は、すべて人種記号とだぶって階級記号とみなすことができる。

この作品でトニ・モリスンが試みているのは、人種記号だけではなく階級記号がアメリカ社会の中でいかに隠蔽されながら作用しているかを問うことでもあった。結婚後のトワイラが低所得者層に属し、ロバータが高給取りの後添えになっているという設定によって、階級記号による二人の主人公の区別をモリスンはことさら顕在化し強調している。ロバータにとっては人種記号が、トワイラにとっては階級記号が物語の展開の中でより重要な意味を持つてくるように主人公たちを描き分けている。そして二人を通して階級記号に隠れた人種記号の問題、人種問題が階級問題になる現代アメリカ社会のネガティブな要素の重層的な絡み合いを提示している。

「レシタティブ」において人種記号が階級記号へ移動し、両者の境界線が不明瞭になっているように、ギルロイの「ブラック・カルチャー」は「階級文化」であるという指摘は妥当であ

るともいえる。それはアメリカの黒人人口が低所得者層と結びつく現実があるからである。けれども「ブラック・カルチャー」は「階級文化」であるという主張によって、「人種化」を回避してはならない。「ブラック・カルチャー」は当然のことながら第一義的に「人種文化」であることを忘れてはならない。そこにアメリカ社会の「ブラック」の特殊性があるだろう。

ギルロイが記述しているようにイギリスにおける黒人人口は比較的少なく、アメリカ合衆国にある黒人ゲットーが見られないことを考慮せねばならない。イギリスでは大都会の人口密集地域の中でもっとも黒人人口が多いとされる地域でも、「三〇から五〇パーセントの白人人口が占めている」（ギルロイ『人種主義の解剖』、²⁷³）であり、アメリカの人種や階級による顕著な住み分けは、イギリスには見られないアメリカの特殊性である。ギルロイはブラック・コミュニティについて言及しているが、ブラック・コミュニティとは、「もちろん黒人の地理空間的集中化を意味するだけではない。特定の精神的価値観を備え、その文化的結合が政治的に特定の振舞いを可能にする解積共同体である」（²⁷³）と述べている。文化形態や言語、教育において特定の個性を持つ共同体であり、それによって特定の政治姿勢が促される共同体である。そしてギルロイは、かつてそうであったほどに階級によるアイデンティティ、階級による政治性、および階級理論が、イギリスにおいては確かなものではなくなっているが、それでも今日の階級による社会構造がその共同体組織を成立させていると主張する（²⁷³）。

黒人ゲットーの存在するアメリカにおいても、「黒人社会」が常に地理空間的な隔離地帯をあらわすのでないことは言を

待たない。けれどもイギリスと比較して、ギルロイの主張するほどには階級の特質化ではなく、あくまでも人種の特質化であることを強調しておかねばならない。アメリカの人種問題は、他の人種を含む前に歴史的な「黒人問題（ニグロ・プロブレム）」として認識されてきている。

5 階級記号

「レシタティブ」が人種記号の曖昧性を提示したことに注意を払い、前述の記号の他にモリスンが書き込んだ人種記号・階級記号を列挙したあとで、人種の曖昧性をテーマにしたアメリカ文学のその他の作品について検討したい。

「レシタティブ」の登場人物の一人、ロバータの姓をフィスクにしたことに意図はなかったのだろうか。フィスクは南北戦争後の一八六六年テネシー州ナッシュヴィルに設立された名門黒人大学の名前であり、黒人指導者R・W・B・デュボイスの卒業した大学である。一八七一年に在校生によって構成されたフィスク・ジュビリー合唱隊は、大学の運営資金の一助を求めて、アメリカのみならずヨーロッパ各地で演奏旅行をするようになり、今日でもその活動を続けている。アメリカ人読者であればフィスクと名門黒人大学はすぐに結びつき、知的上流階級を指示する記号として諒解される。人種記号であると同時に階級記号になっている。ロバータが黒人であるとすれば、フィスクという姓は誇り高い名前なのである。

いっぽうトワイラの姓に関して、ルシル・P・フルツはそれ

をジョンソンと確定しているが、これは誤りである。作家の側になんらかの理由と意図があったのどうかは不明だが、トワイラの旧姓は書き込まれていない。けれどもフルツがジョンソンと思い込んだところにいくばくかの理由はあつたかもしれない。ジョンソンで想起されるのは、リンカーン大統領の暗殺によって副大統領から大統領に格上げになったアンドルー・ジョンソン（一八〇八―七五）である。南北戦争終結後、奴隷制度廃止によって追放された白人農園主たちだったが、南部社会の潤滑な統治を図った治世者はかれらを呼び戻すことになる。その結果、ふたたび力を獲得した白人たちは、解放された元奴隷と自分たちとの格差を確保するために人種差別法を諸州で制定していく。解放された奴隷は結局のところアメリカ市民にはなれず、「アメリカの黒人」、アメリカ社会に暮らす肌の色の黒い人々、という特殊な立場に置かれるようになり、再建時代は混乱を呈することになった。

トワイラの姓がその最高責任者である大統領と同じだったとフルツが思い込んでしまったのは、「アメリカの黒人」の将来を左右した者と「白人」のトワイラを結びつける潜在的な衝動があつたからなのかもしれない。たしかにジョンソンは平凡な姓で特に意味を持たないとも言える。あるいは一〇代の半ばにトワイラが給仕として働いていたハワード・ジョンソンという全米に展開したチェーン・レストランと結びつけ、労働力を搾取される白人資本の会社をあらわす階級記号であるのかもしれない。とにかくフルツのまちがいにすら人種あるいは階級記号を読み込む契機は隠されているのである。

トワイラとロバータが孤児院に収容されていた時の情景の

ひとつに、昼食の内容についての記述がある。ロバータの母親は、「チキンの脚と、ハム・サンドイッチ、それにオレンジ、箱入りグラハム・チョコレート・クッキー」を持参し、「ロバータは魔法瓶に入った牛乳を飲んだ」(161)。用意周到に選ばれた豪華なピクニック・ランチには、病弱なロバータの母親の思いが込められている。いつぼうトワイラの母親は何も持って来なかった。その母親を「殺したかった」(161)とトワイラは回想しているが、そこで「不適切な食物はいつも不適切な人々と共にある」(162)と言い、食堂で働くようになったのは、適切な食べ物を適切な人々に組み合わせる仕事を求めたからであるうと理由をつけている。その理由はこじつけにしか聞こえないが、健康志向のアメリカ社会で、ジャンク・フードのような「不適切な食物」を気楽に食べるのは、栄養について考えることをしない教養のない黒人、下層階級という勝手な諒解があり、トワイラの発言は人種記号であり階級記号になっている。

トワイラの母親は緑色のズボンをはき毛皮のジャケットを羽織っていた。そのポケットは破れていたと但し書きがあり、毛皮ではあってもけっして豪華なジャケットではない。そして「エステル社のパウダー」(160)のにおいがしたとあるが、これも香水ではなく、汗止め・体臭隠しのパウダーであることを示しているのであり、階級記号であるとともに黒人が好んだパウダーという推測を含む人種記号として読むことができる。

その他の人種記号・階級記号には、トワイラの夫の職業が消防夫であることよって、多くの読者はすぐにアイルランド人の移民を連想する。歴史的に消防夫や警官はアイルランド人の移民たちの職業とされ、あるいはかれらが安定した職業とし

て確保し、自分たちの縄張りとして牛耳っている現状がある。一九世紀においてアイルランド人労働者は黒人よりもひどい、汚い、奴隷並みという評判を立てられていたことを考えると、この職業設定は人種記号であり階級記号である。

トワイラが結婚した相手の家は、家族の絆が強い「にぎやかな大家族」(163)で、ベビー毛布ですら大事に扱い、代々、使いつづけている。ポーチのブランコ型椅子は夫の祖母の持ち物で、夫の父親より古い年代のものである。七〇年代においてこのような暮らし振りであることから推測すると、トワイラの婚家はけっして裕福ではない。ポーチにブランコ型の椅子があるという設定は、冷房のなかった頃、暑い南部に住む貧しい人々が涼を求めてポーチで体を休めていた風景を思い出させる。これは南部・黒人そして貧困層の表象である。

町外れに高級志向のグルメ・ショップが開店したというので、好奇心から出かけていったトワイラは、久しぶりにロバータに出会う。ロバータにとってアスパラガスや高級飲料水は日常生活の一部になっているのに対し、トワイラは高級アイスキャンデーを買うのが関の山である。ここで強調されるのはロバータとトワイラの階級の差で、ロバータには中国人と思われるお抱え運転手がいることがわかり、二人の使用人がいることも明らかにされる。しかも夫の職業はIBMのコンピュータ関連という、今をときめく職域である。このような経済的格差は一般的に人種記号にもなりうる。高学歴・高収入を追求するのは白人層であり、取り残される黒人層という図式である。

七〇年代半ばから問題になっていった強制的バス通学「バスング」による白人・黒人のインテグレーション（人種統合学

校政策)は、父兄の関心事になったが、ロバータもその渦中にありデモンストレーションに参加する。ふたたび出会った二人は、正反対の立場でデモに関わる。

「バッシング」賛成のトワイラと反対のロバータという構図は、当時の傾向を当てはめればトワイラが黒人でロバータが白人と見なされる。またその時の二人の会話はギクシヤクシヤしていたが、その中で「だって自由の国じゃないの」とロバータが言い、「まだそうじゃないわ、将来そうなるけど」とトワイラが答えている。「まだそうじゃないわ」という主張は、一般的に黒人の思いである。するとここでもトワイラが黒人になり、ロバータが白人であるという構図になる。

トワイラの指摘にもう一つ見逃せないものがある。「かれらはボーゾーだわ」と「バッシング」のデモをしている母親を孤児院の強圧的だった教師に喩えている。「かれらはいったい何様だと思っているの。自分たちがこの場所を所有しているとでも思っているのかしら。そこら中に群がって道路を占拠しているじゃないの。そしてわたしの子供の行く学校を自分たちが決定できると信じている」⁽¹⁶⁸⁾。このトワイラの批判は、支配者階級への批判であり、この発言は階級記号になっている。デモ隊はトワイラの車を取り囲み揺すぶったため、トワイラのハンドバッグの中身がこぼれおちるが、そこから出てきたのは、食料品の割引クーポンだった。食料品の割引クーポンが二度も繰り返され強調されるところに、作者の意図的な階級記号を読むことができる。

トワイラの家庭の状況は階級記号をたくさん含んでいる。息子のジョセフが州立大学へ進学したことじたいがトワイラの

家庭では「出世」であったが、そのために儉約せねばならず、クリスマス・ツリーを飾るのは止めておこうと決断すること、そう決断しながら最後の瞬間にセンチメンタルになって、ツリーを飾らないなんてそれほどひどく悲しいことはないというツリーを買いに出かけること。そこに社会習慣に一樣に同調しないと落ち着かない一般人の心理を読む。

このように「レシタタイプ」の物語の後半には、人種記号とともに階級記号が頻繁にあらわれている。それでも前述のように、最後に強調されるのは孤児院のマギー事件の記憶である。トワイラは事件そのものを記憶していなかったのだが、ロバータに出会うたびにこの事件が記憶の中に刻まれていく。そして最終的には、自分もその場にいたこと、突き倒しはしなかったが、だからといってマギーを助けようともしなかったことが確認されていくのである。ロバータによって記憶の喚起と追認がなかば強制されたことに意味がないはずはない。マギー事件の追認したいがここでは人種記号になってくる。

この事件に関する最終的な告白の部分で、トワイラは「マギーはわたしの踊る母親だった」⁽¹⁷⁰⁾と断言し、母親とマギーの近似性を展開する。

たぶん耳が聞こえなかった。それに話せなかった。中身はからっぽ(ノーボディ)。夜泣いたって、空っぽだからその声が聞こえない。人生の知恵なんか教えてくれない、からっぽだから。前後左右に体を揺すりながら、踊りながら歩く。そして孤児院の悪ガキ娘が押し倒し乱暴しても、ぜったいに声をあげない、いいえ叫べないのよ——わたしと同じで——それでよかつ

たのよ(170)。

このトワイラの指摘する近似性は重要である。マギーも自分の母親のメアリーも「ノーボディ」であるというが、かれらは「ノーボディ」になり空っぽにならざるを得ない特定の人々を代表している。外側の抑圧や乱暴を受けても抵抗もせずに押し黙るばかりの人々である。

そしてトワイラの「突き倒しはしなかったけれど、でも実はやりたかった」という告白は、ロバータの「わたしたちはマギーを蹴り倒したりしなかったわ。あの悪ガキ娘たちがやったのよ。でもそうね、わたしも本当はやりたかった。あの悪ガキたちがマギーを痛い目にあわせるようになって心から願っていた。(略)あの日、どういいうわけか本当に自分もマギーをやっつけたかった——やりたいと考えることはすでにやっていることよね」(171)という告白になる。二人によって描かれるマギー事件の意味がこの点に収斂されるのである。

抵抗をせずに押し黙っていたマギーを「それでよかったのよ」と結論づけるトワイラと「本当はやりたかった」二人の心は、最後のロバータの「いったいマギーに何が起こったの」という叫びへ展開していく。

それは人種的背景であろうが階級的背景であろうが、個人を取り巻くさまざまな記号によって束縛された日常生活の中で、体制により抑圧されている弱者たちの表現できない苦悩、かれらの心の中のアポリアを示している。表現したところで改善されることもない現状では、「それでよかったのよ」と思い留まるよりほかにない。

ロバータは最後に、マギーが黒人だったかどうかはもはや定かではないと告白している。そして自分の人生と母親およびマギーの人生を重ね合わせている。

でもねトワイラ、あのときは本当にそう思っていたのよ。勝手に作り話をしたのじゃないわ。黒人だと思っていた。でもね、今じゃあ、わからないわ。マギーはとにかく年寄りだったわ。とつても。それに喋れなかったでしょ、だから頭が狂っているって思ったの。マギーはわたしの母親もそうだけど、施設育ちなよね。あのときわたしも施設育ちになるんだって思っていたわ(171)。

ロバータの母親は病気がちで、そのためにロバータはトワイラと出会った八歳のときばかりでなく、その後も何度か孤児院に戻ってきている。母親が大きな聖書を常に抱え、食事のときにも聖書を読み、体から大きな十字架のペンダントを離さなかったのは、ロバータによる母親もまた施設育ちという説明によって納得されてくる。祖先とのつながりを確認することのできない母親は、聖書の中に確固としたよりどころを求めようとしていた。

母親から見捨てられる恐怖は、ロバータの心理に祖先との断絶感を生み、孤立している弱者としての自分を否定したい欲求に駆られる。その矛先がさらなる弱者のマギーへ向けられる。黒人であるマギーは弱者であり、黒人でなかったとしたら老人であるマギーは弱者である。マギーを「蹴倒す」ことによってトワイラもロバータも強者の立場を確保し、弱者の自分から脱

け出られるという幻想にしがみつくとができるのだが、それが幻想であることもわかっていた。最後の二人の会話は、自分たちがまだ幼かったことを理由に諒解され、それに「寂しかったのよ」、「恐かったのよ」という相互の言葉で補われる。

トワイラとロバータが孤児院で同室になった数ヶ月の体験と、マギー事件の記憶という追体験は、二人を描き出すさまざまな人種記号・階級記号によって意味づけがなされてくる。マギーの人種が最後まで明確にならないように、この作品は最終的にアメリカ社会における人種による区分けの曖昧さを指摘している。曖昧であるにもかかわらず、根源的な意味を持ち、日常生活と精神生活を支配する人種記号の恐怖を指摘しているのである。

デイヴィッド・ゴールドスタイン⇨シャーリーによれば、トニ・モリスンは特にこの作品において人種記号を脱構築することによって、人種主義を脱構築しており、言語や社会に埋め込まれている人種主義に挑戦しているという（「人種／ジェンダー——トニ・モリスンの《レシタティブ》」、『Race / Gender: Toni Morrison's « Recitatif »』, *Journal of the Short Story in English*, No. 27-Autumn, (Angers: Presses de l'Université d'Angers), 90)。「レシタティブ」の解釈については、ゴールドスタイン⇨シャーリーが主張するように、たしかにモリスンは人種主義に挑戦している。けれども人種主義を脱構築しようとしているのではなく、それとはまったく逆に作者は人種記号が曖昧・不明瞭であるにもかかわらず、それがアメリカ社会を支配している状況を強調しているのであり、そこにこそ人種主義の源が潜んでいる

ことを提示しているのである。

6 レイスチェンジ

アメリカ文化・社会がいかに人種志向（レイス・オリエンティッド）であるか。それがいかに白人対黒人の、そして白人の人種主義によって支配されているかをこの作品は明らかにしている。人種志向（レイス・オリエンティッド）が相互作用力であるのではなく、一方通行的であることの認識を促している。

ところが反対に人種志向は両方向的であり、白人と黒人というアメリカ社会の構成要員の人種志向のありかたには相互性があるというのが、『レイスチェンジズ』を書いたスーザン・グーバーの主張である。「レイスチェンジ」とはイデオロギーであると主張し、いっぽうで「セックスチェンジ（性転換）」というジェンダー論があるのに、これまで人種転換の研究がなかったのはなぜだろうと問いかけながら、グーバーは自分の造語「レイスチェンジ」を次のように定義する。

「レイスチェンジ」とは——人種の境界線を横断すること、人種模倣や人種的擬人化、人種を交差して真似ることまたは可変性を提唱することであり、白人が黒人の振りをすること（posing）、黒人が白人として通ること（passing）であり、汎人種的相互性を意味する（5）。

グーバーは二〇世紀の「レイスチェンジ」のありかたを論じ

て、これまでブラックネス（黒いということ）・黒人文化が劣等とみなされ、ホワイトネス（白いということ）が規範になっていたこと、そして黒人から白人への人種転換が強制されていたことを十分に認めている。けれども認めながらもなお、歴史的に人種の変換は肌の色と人種は別であるという決定的な戦法が、自由意思論者（リベタリアン）の活動家や芸術家によって取られてきたと主張する（11）。「白人であれば正しい」と考える社会では、「肌の交易（スキン・トレード）において冒険的な行為とは、政治的に進歩的な黒人と白人がしばしばその立場を交換することである。黒人は白人の特権（privileges）を獲得し、白人は黒人の欠損（privations）を大げさに表現する。そのようにして両者ともにこのような特権を認めているシステムの恣意性を暴露するのである」（11）。

グーバーの誇張したい点は、上記の文章の後半の「特権を認めているシステムの恣意性を暴露する」ことであろう。けれども特権と欠損という並置によって、ここですでに「スキン・トレード」は平等の立場で行われていないことが明らかにされている。

さらにグーバーは『ブラック・ノー・モア（もう黒くない）』という題名の小説を書いた黒人のジョージ・スカイラーと『ブラック・ライク・ミー（わたしのように黒い）』という題名の体験記を書いた白人のジョン・ハワード・グリフィンの、人種越境における対称性を取り上げる。二人の例は、二〇世紀のアメリカ社会において肌の色の境界線を自由に行き来している（this liberal traffic across the color line）証拠であると見なす（12）。

肌の色の境界線の自由な往来は、黒さを取り入れる白人の扮装が、二〇世紀を通して、なぜまたいかにして文化生産の逆説的にも衝撃的なほどラジカル（アナーキーにもなる）であると同時にきわめて保守的（人種差別主義にもなる）な様式として作用したかを私たちに理解させてくれる（12）。

このようにグーバーは言うのだが、『ブラック・ノー・モア』は、白い肌への絶望的な憧憬を転覆してみせた物語であり、テクノロジーの発達により白い肌への転換装置が開発され、それによって白人になると元黒人は白人よりも白くなるという現実から乖離した奇想天外な物語である。『ブラック・ライク・ミー』のグリフィスは、実際に赤外線照射を受けて黒人に変身した著者の、南部の町での個人的な体験を綴っている。やがてグリフィスは白人の世界へ戻るという前提があり、またじつさに戻って行く。いっぽうスカイラーの作品はあくまでも黒人のパッシングがテーマである。

パッシングの意味を白人が理解するのは、黒人に扮したときにはじめて可能になり、すなわち「ブラック・ライク・ミー」体験をしてようやく白人は黒人のことを理解する、それゆえスカイラーの自由な越境が必要不可欠であるとグーバーは唱える。これはたしかに事実であろうが、だからといって平等の立場で「スキン・トレード」が行われていることにはならないだろう。

そしてグーバーは、「ブラック・フェイス」の伝統に言及して、白人が黒塗りになって演じることにより、人種主義のダイナミクスを明らかにしながらアングロ・アメリカン（白人）は黒人

の芸術を体験し、その価値を身をもって理解するようになるという。これは一般にミンストレル・ショーやブラック・フェイスが、白人による黒人のステレオタイプ化であり、白人の文化的黒人搾取であるという通念への反論である。

白人には「人種の羨望（レイシャル・エンヴィ）」があり、黒人文化への憧憬の念があるのだとグーバーは主張する。けれどもここでグーバーは、「アングロ・アメリカンに対するレイスの創造的影響力」(43) という表現を使っている。かつて「レイス」という用語が黒人を特定し、たとえば黒人歌手によつて吹き込まれたレコードを「レイス・レコード」と呼んだ時代があった。グーバーは図らずも無意識のうちにその名残の単語を用いている。ここで「レイス（人種）」という英語の意味が中立的に人種をあらわすのではなく、「黒人」を指示するというアメリカ社会の特殊な歴史的状況が露呈されている。そのような単語が無意識に使用されることにこそ問題の根源が潜んでいるのではないか。

それは前記の「レイスチェンジ」の定義に使われたそれぞれ異なる動詞にもあらわれている。白人が黒人を人種的に模倣するのは、「扮装する、ポーズを取る」のであるが、黒人が白人の真似をする場合は、それは「パッシング」になるのである。すなわち他者の価値観をそのまま自分のものにしようと努力するのであり、全面的に他者になりきることを望んでいる。いっぽう前者の場合は、あくまでも「振りをする」範囲での模倣である。自分自身を消滅させようと努力しているのではない。

このような例を見るだけでも、人種転換が決して両方向性で

はないこと、マイラ・ジェーレンが指摘するように「非対称的」であることは明らかである。マイラ・ジェーレンは、マーク・トウエインの『間抜けのウイルソン』を分析して、取り換えられてしまった同じ日に誕生した跡取息子と混血の奴隷の息子の「レイスチェンジ」が、決して両方向的ではないことを論じている（スーザン・ギルマン編『マーク・トウエインの間抜けのウイルソン』、11）。

アフリカン・アメリカンの白人文化への姿勢は、支配者の文化として圧倒的に価値肯定がなされそのように信じさせられている、そして自分の文化伝統を否定され貶められている支配構造の中での受容の姿勢である。政治的権力は法的権力にもなり、法的権力は社会生活を支配し、精神生活を支配することになる。そのような支配者对被支配者の関係性のなかで、全面的に平等な対称性が存在するはずがない。あくまでも黒人が白人を「模倣する」ときには、「パッシング」であり、今日、距離感をもって白人文化を取り入れることができるようになってきたとしても、支配構造による社会的規範はさほど変容してきてはいない。

グーバーは芸術の領域における「人種の羨望（レイシャル・エンヴィ）」を強調するのだが、それは常に白人の黒人の芸術・伝統への「人種の羨望（レイシャル・エンヴィ）」になつているのであり、決して反対の方向性ではない。黒人の白人への「人種の羨望（レイシャル・エンヴィ）」は強調・分析するまでもなく、大前提として存在するからである。それをみても白人と黒人の「人種の羨望（レイシャル・エンヴィ）」の非対称性は明らかである。

グーバーはさらに、白人は奴隷制度のもとで黒人を服従させたことに対して強い罪の意識を抱いており、白人の優位性はこのような歴史的事実によって確立してきたといっている。それゆえ「白人の抱くそのような恥の意識は、今日のアメリカ社会において引き続き重要な役割を負っている」(xix)と述べている。「白人のアーティストが境界線を越えて浸透する人種記号にずっと魂を奪われてきていること」(45)は、「かれら白人のアフリカン・アメリカン文化への恩義・負債」(45)があることとの証拠であり、それを歴史的に順序だてて記録することが自分の仕事であると説明する。

けれどもこのような白人の黒人文化への「羨望」や「負債」は、じつさいどのような形で現実化されているのだろうか。そしてその対称性は成立するのだろうか。

グーバーは、古代の芸術作品(陶器・絵画など)から説きおこし、白人と黒人の対称性および「レイスチェンジ」の伝統を解説する。紀元前五一〇年に作成されたと推定される二つの顔を持つヤヌスの壺を例証にして、ヨーロッパ人とアフリカ人の白人と黒人の女の顔の独自性と共通根を探る。

両者の横顔を比較すると外的特徴は肌の色のみならず、その顔つきが人種的差異を明瞭にあらわしている。「顔つきだけではなくおそらく心理状態」(3)の違いもあらわしていると分析するグーバーのその「心理(サイコロジ)」の意味は明白ではない。この壺に描かれた人種の独自性は明白で、決して「るつぼ(メルティング・ポット)」ではないが、顔を正面から見ると両者が頭に乗せている壺と両脇の取っ手は、二人の共通項(コ

モナリテイ)であり、「二つの顔が一つの頭になり、一つの人間(ビーイング)」になっている。「その神秘的な二面性は、西洋とアフリカの女性美の相補性を語っている。(略)このように見ると、この壺の目立った沈黙の形式は、人種の混じり合い(comingling, fusing, intermixing) に関してからかうような一つの真実(a teasing truth)を伝えている」(3)というグーバーだが、そのような混じり合いが本当に見られるのだろうか。横顔の髪の毛・鼻・口・顎・宝石・首に、それぞれ人種の特徴があらわれているとグーバーは叙述する。だがそのときに、両者の口の描きかたに注目しなかつたのだろうか。白人の女は口をきりと閉じ、黒人の女の場合は、ブラック・フェイスに特徴的な分厚い唇になっている。そして黒人女は口を開けて歯を見せている。そのような人種の特徴を誇張しているヤヌスの壺が、頭に抱く容器の共通項によって混じり合っているという主張は強引にすぎるのではないか。

グーバーは二〇世紀の芸術作品において特に人種の相補性が見られるとして写真家マン・レイの作品を取り上げる。「モンパルナスのキキ」として有名になったモデルがアフリカンの黒い仮面とともに眠っているように目を閉じているよく知られた作品である。

「黒と白(フワール・エ・ブランシュ)」(一九二六)と題された写真は、細長い顔のキキとアフリカの黒い仮面が水平と垂直に写し出されている。ここでグーバーが強調するのは、作品名の「と(エ)」という並列性である。「人種の、両方／と、ということとはモデルと仮面の交換可能性、あるいは代替可能性を暗示する」(6)という。眠っているキキの無防備な状態に対して、

仮面は警戒して垂直に立っている。しかも仮面はちょうどキキの首のあたりにあつて、様式化した石のような髪の毛あるいはヘルメットが武器になつてキキの首を切ろうとしている構図である、とグーバーは解釈する。「キキはおそらくより高い人間性の意識を備えているのだから、眠っているのか死んでいるのか水平状態で、いつぼう垂直の仮面は逆説的にもより機敏であるように見える」(6)。キキは左手で仮面を支えているのだが、その手は「所有行為というより結びつく行為、仲間意識の行為」(7)であるというグーバーの分析に十分に納得することはできない。

この写真作品にはネガティブ版があり、写真のネガそのままの白黒の入れ替わつた作品である。光を当てられたように輝く白い仮面が黒いキキの顔から「今するりと外れたように」(7)写っている。「ソラリゼーション(露光過度による反転現象)」と呼ばれたこの技法は、たしかに不思議な効果を生み出している。「生命のないオブジェが活気を帯び、命のあるモデルの存在は亡霊のような不在に矮小化している」(7)。後半の「亡霊のような不在」に関して定かではないが、前半の「生命のないオブジェが活気」を帯びてまるで生命を得たように輝く力を漲らしている印象を与えているのは確かである。その黒と白の反転の面白さが芸術作品になつていのは事実である。それでもそれが「スキン・トレード」へ結びつくという飛躍は難しいのではないか。

グーバーは白と黒のこの反転の様子を、写真家マン・レイが、黒人活動家だつたブッカー・T・ワシントンの『奴隷より身をおこして』からの引用、「ときには黒がどこから始まり、どこ

で白が終わるのか明らかにするのは難しい」(7)を写真の中で誇張して表現したのだという。だがワシントンは、アメリカ社会に生きる白人と黒人の関係を人間の手にたとえて、根本では同一だが先の方では五本に分かれる指として白人をそして黒人を納得させようとしたのだ。「純粹に社会生活の面では五本の指のように分かれてはいるが、相互の進歩に関わる根本的な事柄においては手の平のように一つである」(148)と宣言して、白人へ脅威を与えないようにした。黒人の社会領域の限界性を認めて、「分離すれども平等」という社会的・身体的にはまったく境界侵犯のありえない「アメリカの黒人」の立場を強調し、それを唱道した指導者であつた。

グーバーが一行引用した箇所を『奴隷より身をおこして』に当たって見ると、その文脈はまさに肌の色の薄い黒人の苦悶、アメリカ的アポリアのある出来事をワシントンが語っているところであつた。

南部のジム・クロウ法によつて白黒分離が決められている客車で、ワシントンが遭遇したのは、黒人車両に乗っている白人に見える客をどう扱うべきか悩んでいる車掌であつた。その乗客は地元では黒人として知られていたが、「エキスパートでさえ判断しかねる」(82)ほど肌の色が薄かつた。黒人であれば白人車両へ送りたくはないのだが、「あなたにはニグロですか」と誘導しなければならぬのだが、「あなたはニグロですか」という質問をして相手を侮辱したくない。顔を吟味しさんざん迷つた拳句に車掌が取つた行動は、その男の足を見ることがつた。ワシントンはこれで一件落着かうとほっとする。そしてじつさい車掌は黒人だと納得してそのままにした。ワシントン

は話の落ちに、「われわれの人種がメンバーを一人失わなくてはすんでよかつた」(82)と結んでいる。

グーバーが引用した一行は、「スキン・トレード」をする白人と黒人の例ではなく、まさに「一滴の血」理論の曖昧性の問題であり、その認識不可能性の不安の例であった。「黒がどこから始まり、どこで白が終わるのか」というワシントンの言葉は、グーバーがマン・レイの作品で表現されていると主張する、白黒の境界浸透性、境界の曖昧性を語っているのではない。「アメリカの黒人」の定義の困難さを端的に表していたのであった。

グーバーは「人種憧憬(レイス・エンヴィ)」の一つの例として、二〇世紀後半のアメリカン・アメリカンの画家を取り上げている。

『レイスチェンジズ』では、ロバート・コールスコット(一九二五)の絵が五点、例証として分析され、図版が挿入されている。コールスコットは古今の著名な絵画をパロディ化し、白人モデルを



ロバート・コールスコット (エマニュエル・ロイツの「デラウェア川を渡るジョージ・ワシントン」(1851))

黒人に変えた絵を何点も描いている画家である。いわば「レイスチェンジ(人種転換)」の絵画で名前を知られた画家である。挿入された絵の一つは、ジョージ・ワシントンを描いてよく知られたエマニュエル・ロイツの「デラウェア川を渡るジョージ・ワシントン」(一八五二)のパロディで、ワシントンははじめ舟に乗っているのはすべて黒人である。かれらは白い歯を見せて笑い歌い、酒を飲み、釣りをしたり葉巻を吸いながらパンジョーを奏でている。川の向こう側には自由があることを暗示し、川面には「綿花のような流水」(47)が浮かんでいる。アメリカ植民地を解放した指導者を中心に置くこの絵は、「綿花のような流水」によって奴隷制度の存在を暗示していることになるのかもしれない。

ヴァン・ゴッホの「馬鈴薯を食べる人々」(二八八五)のパロディ画では、貧しい黒人の農夫一家が大皿のポテトを突っついていて、ランプの明かりに惨めな暗さはなく、こちらに顔を向けている家族は楽しく笑っている。その大きなピンク色の唇に、グー



ロバート・コールスコット (ヴァン・ゴッホの「馬鈴薯を食べる人々」(1885))

バーは、「アフリカン・アメリカンというより白人がミンストレル・ショーのアフリカン・アメリカンになったようだ」(46)という説明を加えている。ゴッホの絵では貧しい農夫たちに威厳が生まれているのにひきかえ、コールスコットのにやにや笑うブラック・フェイスのポテト・イーターたちは、貧しさを喜んでいるような表情をたたえて二重の屈辱が与えられているという批評家の意見をグーバーは引用する。

そのような批判を引用するいっぽうで、グーバーは「レイスチェンジ(人種転換)」の両方向性を強調する。白人画家による白人を主題にした絵画を黒人画家が登場人物を黒人に入れ換えるという作業じたいが、並列的な力関係に基づく「レイスチェンジ(人種転換)」であるという主張である。ロイツの絵では黒人がアメリカの歴史上の指導者になり、中心的役割を果たしている。グーバーは言う。またロイツの絵もゴッホの絵も、それぞれミンストレル・ショーを想起させるが、それはアメリカ建国の時代からアフリカン・アメリカン文化がアメリカ文化を担ってきたという訴えになっている。グーバーは分析してみせる。「漫画のような手法とパロディ化した添え書きは、西洋絵画やアメリカ文化の歴史において、アフリカン・アメリカンを中心に捉える手段にもなっている」(47)。果たしてそうだろうか。すぐに疑問は湧いてくる。「漫画のような手法とパロディ化した添え書き」でしか表現できないのはなぜなのか。そのような手段にならざるをえないところにこそ問題があるのではないのか。白人が起こした歴史的事件の中でパロディ以外でアフリカン・アメリカンが重要人物として描かれることはない。

人種記号を認識し、モリスンのようにそれに挑戦しているもう一人のアフリカン・アメリカンの画家に注目したい。エイドリアン・パイパー(一九四八)は分析哲学を大学で教えている教師だが、いっぽうでコンセプチュアル・アートの第一世代である。肌の色の薄いパイパーの親類には、パッシングをして白人世界へ入っていった者が多くいるという。「白人へパッシング、黒人へパッシング」という文章をパイパーは書いているが(ウェブサイト)、その題名のようにパイパーはどちらにもなりうる「アメリカの黒人」である。そこに問題の根源がある。人種をあらわすと諒解されている肌の色という外面的な要素ですら、すでに確実な証拠にはなり得ないからである。パイパーは、「ニグロの特徴を誇張した自画像」(一九八一)を描き、「素敵な白人婦人としての自画像」(一九九五)を描いている。このように人種表象がどちらにもなりうる「アメリカの黒人」である。パイパー自身が「触媒反応シリーズ」(一九七〇)といみじくも名づけたように、触媒・第三者・世間に認識される人種記号がその人物のアイデンティティを決定していく。自分ではなく他者の社会規範に条件づけられた視線が、「あなたの」アイデンティティを決定する。「あなたがだれか決断しなさい」(一九九二)という題名にあるように、パイパーは人種の曖昧性を主題にしたコンセプチュアル・アートを発表しているアフリカン・アメリカンの画家である。

このような人種的・社会的曖昧性が問題にならないのが、白人の芸術家の置かれている立場である。それゆえグーバーのように、白人と黒人を並列させ同じ土壌にいるという前提、すなわち人種転換は相互に実践されており、それが相互の理解を深

めアメリカ文化を発展させているという前提で行う分析は初めから無理な姿勢を取っていることになる。人種的羨望は両方通行である、アメリカ社会で白人であることはすなわち人種的罪悪感を持つことである、というグーバーの意見は樂觀的であるといわざるを得ない。それは両方向性をあくまでも立証したという欲求によって始まっている牽強附会の論理である。

7 フィクションとしての「黒人」——フォークナーの『八月の光』

アメリカ社会において「黒人」はフィクションによって「人工的」に成立している。それゆえに「アメリカの黒人」は文学的テーマになるのである。その他、人種記号によるトリックを作品展開に取り入れた作品例はアメリカ文学のなかから容易に挙げるができる。

二〇世紀の作家を思い起こせば、まずフォークナーがいる。『八月の光』はそのような人種分類の曖昧性と認知不能（アグノシア）を主題的底流にした作品である。

認知不能（アグノシア）の恐怖がこの作品のテーマになっているとすれば、主人公が妊娠しているリーナ・グローヴであるのか、孤児のジョー・クリスマスであるのか、どちらかに決定する必要はない。リーナ・グローヴはお腹の子供の父親を探してアラバマから「まったく遠い」ミシシッピへやって来た。距離的に離れた見知らぬ町は要領を得ず、探す相手の存在不明とともに分けのわからない迷宮性が倍加する。そこで探す男の名

前はルーカス・バーチからバイロン・バンチへ流動的に変化し、周囲の登場人物のジョー・ブラウン、実はルーカス・バーチやジョアナ・バーデンという名前が紹介されると、バーチ・バンチ・ブラウン・バーデンというB音で始まる似通った姓を持つ人々によって、リーナのまわりの男たちの存在はますます混乱し曖昧化していく。

少ない情報で男を探すうちに、男の正体は定かでなくなり、リーナ・グローヴ自身が誰を、そして何を追い求めているのか曖昧になってくる。お腹の子供を産むために夫が必要なのか、父親としてのルーカス・バーチを必要としているのか、リーナ・グローヴは明らかにしない。最終的にはルーカス・バーチという空っぽの存在・空っぽの名前になってしまったかつての男に代わって、バイロン・バンチが現実的にリーナのそばにいて代理夫・代理父としての役割を果たす。

リーナの物語ではなくジョー・クリスマスを中心に据えてみると、明らかに人種記号が問題になってくる。クリスマスが最初に登場する製材所の場面で、すでに微妙にクリスマスの人種背景が曖昧化されている。現場主任は作業をしている別の男に、「奴の名前はクリスマスってんだ」とおしえるのだが、それに対して「へえ外国人なのかよ」と男が聞き返している。「白人の男でクリスマスって名前聞いたことがあるかい」という主任に、「そんな名前いっさい聞いたことねえな」（26）と男が答える。「白人の男で」という限定に、すでにクリスマスの出自を問題にする人種記号の可能性が秘められている。クリスマスは白人ではないのではないかという不安があり、認知不能の恐怖が読み取れる。読者はすでにその人種的背景に関して曖昧な

印象を抱くように誘導されているのである。

二人のやり取りによってクリスマスという名前の非存在が強調され、したがってクリスマスという人間じたいの存在証明があやふやになってくる。後にクリスマスが孤児院育ちであることが判明し、父親が誰であるのかわかっていないことになること、その曖昧性はよけいに増してくる。最初の「黒人疑惑」は、クリスマスの祖父ハインズが娘の相手を勝手に黒人と決めつけたことにある。祖父には正式な結婚という社会的規範にのつとつた過程を経ずに子供を産んだということが受け入れられない。そのような相手は黒人に決まっているという祖父の発想にすでに人種的偏見を読み取ることができる。

第二の疑惑は孤児院時代で、五歳のクリスマスに情事を発見されて怒り狂った孤児院の栄養士が、「チビのニガー・バスタード！」(94)と怒鳴り、院長への告げ口を恐れて定かな根拠もなく、「クリスマス少年はニガーなんです」(101)と打ち明けたことである。このような発言や、孤児院のクリスマスを描写して、「五歳にしては小さく、まるで影のようだった。影のように陰気で静かだった」(91)と二度にわたって「影」が繰り返されることによって、クリスマスの非存在性、実体の欠落が強調される。アメリカ社会における影の、沈黙する存在としての黒人が想起されるのである。

これらはみな描写であって人種記号ではないが、クリスマス登場には常に非可視性・曖昧性・非表現(沈黙)がつきまわっている。クリスマスは白人にもなり、黒人にもなる。外観では白人であるクリスマスが黒人であるかもしれないのは、父親の人種的背景が明白でないからだ、そこで問題になっているの

はアメリカ社会における黒人を定義する「一滴の血」理論である。「一滴の血」理論が信奉されているからこそ、クリスマスの人種的アイデンティティが不明瞭になるのであり、そうでなければクリスマスは白人である。アメリカ社会で恐れられる認知不能の恐怖は、「一滴の血」理論がそれを助長する。

ジョー・クリスマスがリンチにあったのは、まさに認知不能の恐怖・曖昧性の恐怖を共同体の白人の間に募らせたからであった。「奴はニガーのようにも白人のようにも振る舞わなかった。それなんだよ。みんながあんなに怒ったのは」(263)という町の男の言葉は、白人であるのか黒人であるのか、どちらかに分類せねばすまないアメリカ社会の人種主義をあらわしている。アンドレ・ブレイカステンは、一つのアイデンティティと二つのアイデンティティを持つことについて、「一つのアイデンティティを持つことは一人の人間であること。二つのアイデンティティを持つことは誰でもない存在になること。クリスマスは歩くオクシモロン(自家撞着)であり、その否定である。白人であり黒人であり、そして結局どちらでもない」(ニューエッセイズ、83)と述べている。肌の色の薄いクリスマスは「パッシング」を選ぶことができたが、あえて選ぶことを選ばず拒否したとブレイカステンはいう。それは「南部社会が押しつけてくる既製のアイデンティティの枠組み」に入ること拒絶することであった(83)。

娼婦とのやりとり、ジョアナ・バーデンとの付き合いかたにブレイカステンの指摘する「既製のアイデンティティの枠組み」への挑戦が読み取れる。リンチ直前に床屋へ行く場面では、「白人の振りをして白人の床屋へ行った。白人のように見える

から、だれも疑わなかった」(263) というように、クリスマス
の堂々とした態度には白人と黒人との枠組みをもととせざる
に、それを破壊しようという強固な意志が感じられる。子供の
ころからアイデンティティを確定できずに、周囲の者たちから
その不確定性を時に応じて想起させられたクリスマスは、おの
ずから「白人であり黒人であり、そして結局どちらでもない」
という、社会規範が許さないアイデンティティのありかたを選
んだのである。そのように社会の調和を騒乱させる人物は、社
会秩序を信奉する人々により抹殺される。

『八月の光』には、否定的な意味合いを喚起する「におい」
が印象深く書き込まれている。消すことができずにそこにたし
かな存在としてあるにおいではあるが、その特質としてにおい
は具体化されることはない。クリスマスが黒人の町フリードマ
ン・タウン（解放奴隷の町）へ知らぬうちに入り込んだことが
においによって認識される。さらにこの描写は、作者によつ
て「フリードマン・タウン（解放奴隷の町）」と意図的に名づけ
られた黒人共同体がアメリカ社会において、いかなる存在であ
るのかを消極的に示している。かれら白人の精神領域において
黒人社会はどのように思い描かれるのか、図らずも提示してい
る箇所である。

フリードマン・タウンには夏のおいと見えないニグロたち
の声が漲っていた。クリスマスのものとは異なる言葉で、身体
のない声がささやきあったりお喋りしたり、笑ったりしてクリ
スマスを取り囲むようだった。真っ黒い穴の底から、薄暗いケ
ロジンランプに照らされた小屋に囲い込まれた自分を見つめて

いるようで、街灯はますます間遠になり、黒い命、黒い息遣い
そのものがその息の実体をなしていて、声ばかりでなく動いて
いる身体や明かりそのものが流動的になり一体になって、ゆつ
くりと今や引き離しがたく重みを増した夜の一つの小片から小
片になっていくようだった(87)。

夜の黒人町の描写は、そのままアメリカ社会における黒人の
存在への白人の感情・感覚をあらわしている。「見えないニグ
ロたちの声」は視覚性に欠けているにもかかわらず確かな存在
であり、顔のない恐ろしさを伝えている。かれらの声の充満は
否定できず、なおかつよそ者であるクリスマスを取り囲み、ク
リスマスはその違和感に圧倒されていく。「闇の中で黒々とし
た形をなす小屋」(88) は黒人の暮らしがそこにあることを示
してはいるが、昼の明るさの中で確認できるような明らかな輪
郭を描いていない。フリードマン・タウンに足を踏み入れてし
まったクリスマスは息遣いも激しくなり、窒息状態になる。そ
して「この黒い窪地」(88) からようやく脱け出して白人居住
区へ出たクリスマスだったが、「白人の冷たくきびきびした空
気になっていた」(88) ことが信じられないほど呼吸は激しく、
心臓は鳴り響き、ぜいぜいと喘いでいる。

「アメリカの黒人」の共同体の真っ只中に迷い込んでいった
クリスマスの身体的体験は、かれらのたしかかな息づかい・存在
を確認させられる行程であった。もっともこの描写はもう一
つ、「明かりがなく暑く湿った長子相続的〈女〉」という根源的
な「女性」体験の喩えにもなっている。けれどもその「黒い
窪地」から脱出したクリスマスが、「ニグロのにおいやニグロ

の声はすでに背後に下方へ移っていた」(88)と感じられると、冷静になり白人の町を丁寧な観察することができるようになる。そこは同じように夜の町であるにもかかわらず、黒人町とは対照的に明るく、灯のともされたポーチでトランプに興じる四人の姿が認められる。その四人の表情すら微細に描写され、身体的な形状を伴い、個人として独立した存在として数えられている。いつぼう黒人は姿も認められず、形状を伴わない声としてのみ認識されていた。

クリスマスは白人が足を踏み入れない黒人町へ無意識のうちに迷い込んでいった。無意識のなかでクリスマスは白人であることと黒人であることを体験し、両者の間でどちらかに確定されることはなく、ひとり喘ぎながら生きていかざるをえない。白人であることも黒人であることもクリスマスにとつては認識不可能なのである。それは「黒人のおかげ」といいながら、それを形状として確固としたものとして認識できないことにつながる。

そのようなクリスマスは死へ向かうのだが、その場面でも「ニグロのにおい」が強調される。クリスマスは自分の作業用の大きな靴(ブローガン靴)を見下ろしながら、その靴が、「鉄鋼石を鈍い斧でぶち割ったように見え」(249)、「その荒削りでぶざまで不格好な無形状の靴」を見ながら、そこに自分の運命を読みとっている。物語の最初の場面でリーナ・グローヴが都会の象徴として靴を大事に抱えているように、クリスマスは「ニグロのにおい」のする黒い靴を抱えて、「ついに白人の男たちに追いつめられて、黒い深淵の中へ落ちて行く自分」(249)を見るのである。その深淵は三〇年間クリスマスを待ちつづけ

ていたものであり、すでにクリスマスはそこへ入り込んでしまったと感じている。「ニグロのにおい」がする黒い靴は無形状のカオスであり、アイデンティティを確定することが不可能なために起きる悲劇Ⅱ死をあらわすことになる。

黒い靴とニグロのたとえは物語の中で何度か言及されている。「ニグロのにおい」というアイデンティティの特質は、白人の場合には成立しない。唯一この作品で白人とおいが関わっているのは、町の除け者である牧師ハイタワが八月の暑さの中で、いつものように窓辺に寄りかかっている場面である。

自分が暮らしているまわりの匂い (odour) を忘れ、八月の暑さの中でハイタワは窓辺に寄りかかっていた——もはや命をもつて生きてはいない人々のあのおい、あのですっかり乾ききったにおい、墓場の先触れのような古びたりネンのおい(239)。

ハイタワを取り巻く匂いは経帷子のリネンのように、まわりつく死を暗示するものとして描かれている。ここでにおいは否定的なものとして取り上げられている。

それでは黒人町においもまた否定的なものなのだろうか。クリスマスが黒人町へ入り込んだときの夏のおいは、暑さでやり場のなくなった生命力の象徴であったのか、それとも黒々と漲っている底知れぬ力を象徴していたのか。形状をなさない声と同じように、形状をなさなくとも確実に存在しているにおいは、「影」のような夜の黒人町の象徴として消極的に存在を

主張する。

ジョー・クリスマスは「現代のエヴリマンであるゆえに、われわれはクリスマスと結びつくのである」(『二〇世紀解釈』、97)とジョン・L・ロングリー・ジュニアはいう。そして「恒常的なものは唯一不合理で不安定性な世界で、われわれは合理性以外のものしか期待できないのである」(97)というロングリー・ジュニアの矛盾する発言は、それでも真実をついている。『八月の光』において、リーナの人生が終わるのではなく、元の男友達と似通った名前の男に付きまとわれながらリーナは旅を続行する。白人と黒人の二つの世界・二つのアイデンティティの間を行ったり来たりするクリスマスは、まさに恒常的な不安定性を生きていたのだった。

そのようなクリスマスの存在は、「アメリカの黒人」の宿命を表象している。アメリカ人として自分が認証されることはないので、それでもアメリカ市民であるはずのかれらアフリカン・アメリカンたちである。『八月の光』のクリスマスの死は、人種記号が具体的に付与されることすらなかったにもかかわらず「黒人疑惑」をかけられ、存在証明そのものが意図的に曖昧にされた人物の悲劇であった。

8 フィクションとしての「黒人」——マーク・トウェインの『間抜けのウイルソン』

人種の曖昧性を取り上げた作品としてマーク・トウェインの

『間抜けのウイルソン』(一八九四)を挙げねばならない。同日に生まれた白人の跡取息子と肌の色の薄い乳母の息子との取替えばや物語である。これは当時において最新の科学であった指紋学を研究する町の新参者で変わり者のウイルソンによって、個体のアイデンティティが特定され、ムラートの母親が息子の将来を思っってやった謀略が暴露されるという内容の作品である。

ここでもまた前提になるのは、「一滴の血」理論である。南北戦争後になされた差別法(ジム・クロウ法)の制定のなかから、一八九〇年代半ばまでには南部社会、さらにはアメリカ社会のほとんどで「一滴の血」理論が支配するようになっていた。二〇世紀初頭にはかつての南部連合を構成していた南部の一七州のうち一六州までが異人種間の結婚を禁止していた南部の制定し、一九三〇年には全米四八州のうち二九州までが異人種間の結婚を禁止することになる。一九七〇年にいたるまでルイジアナ州の法律は三分の一でも黒人の血を持てば、その人物は黒人であると規定していた(ギルマン、ロビンソン編『マーク・トウェインの間抜けのウイルソン——人種・闘争・文化』、スーザン・ギルマン、94)。結局のところほんの少しでも混じれば黒人と認定されると言う「一滴の血」理論が優勢を占めていたのである。アルビン・トゥルゲーは一八八八年に「フィクションの場としての南部」というエッセイを書いたが、このように黒人の定義が、奴隷解放後にまったく恣意的に人工的に法律によって作られていったのである。さらに法律は社会の慣習を一定の目標へ導いていく。アメリカ人でもない、そしてかならずしも黒い肌ではない「アメリカの黒人」が誕生していったのである。か

れらは法律および世間の慣習によつて差別され蔑視され、アメリカ社会で生きる苦闘を強いられることになる。

トウエインは『間抜けのウイルソン』で、個人のアイデンティティを確定する科学的で正確な一つの手段として、そしてまた希望的な手段として指紋学を取り上げた。指紋学は、一八六〇年代にウイリアム・ハーシェルが犯罪者を特定する科学的手段として唱道し、ドクター・ヘンリー・フォールズが一八八〇年に、法医学の分野で指紋学を支持していた。ダーウインのいとこフランシス・ゴルトンは、一九〇一年に犯罪者特定に指紋学を利用するようにイギリス警察に提案した人類学者・優生学者である。ゴルトンはすでに一八九二年に指紋学に関する本を出版し、それが一般にも読まれるようになっていた。トウエインもまたゴルトンの『指紋学』を読んで知識を得ていたのだろう。科学によつて曖昧性が解決するというのは、まるでデウス・エクス・マキナである。アポリアに陥ったときに空中から舞い降り、難儀を解決してくれる神の登場のようで、すべてが科学的に客観的にそして正確に判断できるように思われた。ちなみに日本の警察が指紋学を犯罪者特定的手段に利用するようになるのは一九〇七（八）年である。

指紋学はもちろん人種の特定はしない。だが指紋学が人種を特定する可能性があるかもしれないという期待があったのだろう。ゴルトンの『指紋学』の第二章は、「人種と階級」という章題で、指紋と人種の間接関係を叙述している。

それによると、ゴルトンは、「イギリス人、純粹ウエールズ人、ヘブライ人、ニグロ、バスク人」の指紋を調査したが、いかなる結論に達するにしろ「きわめて忍耐深く慎重」でなけ

ればならないとはじめに警告している⁽¹⁷¹⁾。そして「上記の例では人種的特徴のある指紋はないということを強調せねばならない」⁽¹⁷¹⁾と記している。さらに五〇人の「右手の人差し指、中指、薬指」を検査したが、そしてその数は統計を取るには決して十分とは言えないにしろ、「人種を特徴づけるはつきりした印はないということが明確になった」⁽¹⁷³⁾と述べている。ところがそうほとんど断言したあとで、「ニグロの特徴」を示唆するのである。

ニグロの指紋例は一般的に格好の悪さを示していたが、指紋の型は、私が理解したかぎりでは、他人種のそれと異なるところはない。指紋に含まれる起点・分岐・丘（宮）・囲いの数や輪郭線から判断すると、ニグロの指紋が他人種の指紋より単純であるのでもない。にもかかわらず、私のまったくの想像なのだろうか、あるいはまた実際の指紋が採取された方法によるのか、あるいはまた実際にある特徴を備えているからなのか、ニグロの指紋例は、私から見るときわめて特殊である。隆起線の幅が私たち白人のそれよりもっと一律で、その間隔は規則的、その道筋はより平行な線をたどっている。簡単にいうと、ニグロの指紋はより単純であるような印象を与える。その原因が何であるのか、私はまだつきとめてはいない⁽¹⁷³⁻¹⁷⁴⁾。

最初の段階では、指紋における人種的差異はないと断言しながら、「私のまったくの想像なのだろうか」と平然と科学者としての姿勢にあるまじき前提を置いて、そのうえで「ニグロ」の指紋にはある特徴が見られるという。なおかつその原因はま

だ判明していないとも述べるのである。このような姿勢が二〇世紀への転換期においてすら当然のように認められていたことに、現代の読者は注意を向けておかねばならない。さらにゴールトンの問題点は、このようなニグロの指紋の特質を示唆したそのすぐあとで、調査研究においてロンドンの白痴者の指紋も収集し検討したが、それらと著名な学者との比較において何らの差異も認められなかったと記述していることである。精神障害者の指紋は健常者あるいは偉人の指紋と変わらないが、黒人の指紋には差異が「どうもあるようだ」という示唆のしかたにすでに人種記号的判断が認められる。

『間抜けのウイルソン』において活躍する指紋学には、このように黒人差別的な解釈がすでに入っていた。トウエインは指紋学に関して黒人の特質があると主張しているのではない。不可視的な指紋が動かぬ証拠になって、白人と黒人の取替えばやが発覚する。そもそも取り替えばやを仕組んだムラートの母親ロクサーナ（ロクシー）の愚かさを、トウエインは次のように描写する。

「すばらしい常識を備え、日常生活の知恵に長けていたロクシーだったが、息子を溺愛する点では愚かな母親だった。そればかりか自分自身で生み出した作り話（フィクション）の結果、息子がロクシーの主人になってしまった」（41）。その姿勢・態度を日常的に繰り返すうちに、それは習慣になり、「自動的・無意識的になった」。そしてその当然の結果は、他者のみを欺くはずだったものが、やがて自己欺瞞になったことである。うやうやしい恭順の姿勢が本物になり、媚びへつらう真似をしていたのが現実的な媚びへつらいになった」（41）。そして偽の奴

隷と偽の主人の懸隔はますます広がり、ついに両者の間には深淵が生まれた。「息子はロクシーのいとしい子であり、主人であり、それらが一つに合体した神性なる者であった。その息子を崇拜するうちに自分が誰であるのか、息子がかつてはどうだったのか、すっかり忘れてしまった」（41）のである。

マーク・トウエインの書きかたを追っていくと、この作品で作者が諷刺しているのはアメリカ社会における白人と黒人の、そして主人と奴隷の「フィクション性」であることは明らかである。ロクシーを息子のしあわせを願う愚かな母親として描き出しながら、その結果、自分自身が息子の奴隷になるといって逆転現象は、奴隷制度のゆえである。またフィクションによって取るようになった態度が習慣化すると、それがすでに無意識の行為になっていくという精神の作用が問題にされている。すなわち社会習慣が黒人や白人を人工的に作るのである。

取替えられた息子たちは、それぞれの立場での生きかたを習得していくことになる。赤ん坊の頃の「トム」は、「チェンバーズ」をびしやりと平手打ちしたり、殴ったり引っかかりたりした。それに対して「チェンバーズ」は、おこったり引かず、嫌なことだとは思いつつも早い段階で相手に主導権があることを理解した。耐えがたいほどの暴力を受けたときには、ようやく反撃に出たのだが、それは当局、すなわち白人の父親が出る幕となり、「お前は若主人がだれか忘れたのか」という叱責を受けることになる。さらに「小さな主人に向かって、いかなる場合でも手をあげてはならぬ」（42）と命令される。

主人と奴隷の主従関係は不条理な隷属を強制しているが、そのなかで奴隷たちは、「トム」に対する「チェンバーズ」の関

係のように、生き長らえていくためには無抵抗の姿勢を取らざるをえない。すなわち現実の人種の差異ではなく、社会が認められた主従関係によって両者の関係性が規定されていくのである。そのような立場に追い込まれた「ニグロ」だからそうなるのであり、生物学的な民族の差異がかれらを奴隷化しているのではない。これは一般に、黒人は生物学的に奴隷になるように運命づけられている、苛酷な労働に耐えられる身体を備えているという当時の社会通念へのトウエインの反論であろう。

ロクサーナの黒人の血を説明しているところに作者トウエインの社会通念に対する皮肉を込めた姿勢を読み取ることができる。

ロクシーは他の人と同じように白かったが、その一六分の一が黒かったために、それが残りの一五の因数を得票数で抑え、ロクシーは黒人になった(29)。

その息子は三一の因数が白人だったが、それでもやはり奴隷であり、法律と習慣というフィクションによってニグロになった。白人の友と同様に青い目に金髪の巻き毛だった。けれどもその白人の子供の父親でさえ、お互いの交易(かかわり)はほとんどなかったのだが、二人の子供の違いを見極めることができた——着ている服によって(29)。

民主主義社会のアメリカでは多数決の論理が支配している。その多数決からすればおかしな結果であるのだが、「一滴の血」理論のその強引な論理をトウエインは揶揄する。しかも同日生まれの男の子二人の差を、身体的外観では見極めることがで

きないのだが、洋服というような表面的なもの、そして社会習慣によって見極めることができるという落ちをつける。ブッカー・T・ワシントンのジム・クロウ列車での体験もそうだったが、「一滴の血」によって黒人と定義された「アメリカの黒人」たちの悲劇は、トウエインのように、ワシントンのように、笑い飛ばしてぐり抜けるよりやり場のない矛盾、不合理を生み出していったのだった。

この物語の結びでは、真犯人を特定するのに指紋が究極的な証拠になる。指紋採取をしていた「間抜けのウイルソン」は、その学問を評価され、間抜けどころか立派で共同体の役に立つ人物であることが人々によって納得されることになる。この作品のタイトルが『間抜けのウイルソン』であり、その表題名が作品の主人公であると思えば、最後にウイルソンが男を挙げためたしめでたしの物語として解釈されるだろう。けれどもライト・モリスは別の主張をしている。

物語の最後は「川下へ(ダウン・ザ・リヴァー)」という語句で終わっているのだが、この作品のタイトルは「ダウン・ザ・リヴァー」であるべきで、そのほうが「より想像力を駆りたてるし、また正確である」(xi)とモリスは言う。ウイルソンの指紋学は、「川下へ(ダウン・ザ・リヴァー)」というテーマの一部をなすに過ぎないということだろう。そもそもこの物語は、当時アメリカで話題になっていたシャム双生児に触発されて、トウエインが双子の登場人物を考案し、そこからアイデンティティという問題を展開していったのだとモリスは分析する。

「川下へ(ダウン・ザ・リヴァー)」というのは奴隷を処罰的に「深南部」へ売ることである。「深南部」と呼ばれた酷暑の地域の

綿花畑で厳しい労働を強いられることは、奴隷たちにとって最悪の運命であった。ロクシーの息子の「トム」は最終的に「川下へ（ダウン・ザ・リヴァー）」売られていったのだが、それは「トム」がそもそも奴隷であったからこのような処罰を受けたのである。いつぼうで奴隷だからそのような極刑によって処罰したと考えるより、「川下へ（ダウン・ザ・リヴァー）」売られる運命は、重大犯罪者を罰するときの量刑と見なされるほどひどいものだったことを作者が伝えているのもある。奴隷は理不尽にも、常にその恐怖に晒されていたことを伝えている。

だがそれよりも「チェンバーズ」になってしまった、もともと白人の息子のその後の悲劇的な状況こそ、この物語で強調されるべきことだったのではないか。

奴隷として育てられた「チェンバーズ」は、奴隷の喋る崩れた英語しか使えない。読み書きもできない。「そのあるきかた、態度、身振り、振るまい、笑いかた——すべて野卑で無骨だった。その立ち居振舞いが奴隷だった」(166)と述べられ、いくら金をかけても美しい洋服を着ても繕うことはできず隠すこともできなかつた。しかもそう努力すればするほどかえって奴隷の立ち居振舞いが目立ってしまった、「悲惨な」(166)状況になる。そして結局は白人社会にも黒人社会にも受け入れられないという宙ぶらりんの周縁の領域におかれてしまうのである。白人社会にパッシングをした黒人の悲劇は、アフリカン・アメリカン作家たちがテーマにしているところであるが、『間抜けのウイルソン』の「チェンバーズ」の場合はその逆の、黒人社会へ「パッシング」させられた後、ふたたび白人社会へ戻ってきた白人の悲劇である。

「哀れな男は、白人の家の客間にいると耐えられないほど恐ろしくなった。台所こそ心の平安を感じ、くつろげる場所だった。教会に行けば特別家族席で惨めな気分になるのだが、かといってへニガー専用の机敷にもはや入れてもらえなかつた」(166)という「チェンバーズ」の悲劇をトウエインは、「その好奇心をそそる運命についてこれ以上は言えない。それを語り始めれば長い物語になってしまうから」(166)と弁明している。「長い物語になってしまう」のは人種の分類が個人のアイデンティティの重要な要素になっているアメリカ社会で、アイデンティティが曖昧化するという根源的な問題を抱えているからである。

マイラ・ジェーレンは、この作品について「人種と性」に焦点を当てて論じている。スーザン・グーバーは「レイスチェンジ」が白人と黒人の両方向的な作用であると主張したが、ジェーレンの指摘は両方向性ではないことを見抜いている。ジェーレンは、このテキストは物語の展開にともない人種に関してエッセンシャルの度合いを強めていると述べ、次のように続ける。

トム（ロクシーの息子）の立場になった白人の男もまたエッセンシャルの特徴をあらわにすることが期待される。ところがそうではない。間違つて白人の中に運命的に（fatally）置かれた黒人トムとは異なり、チェンバーズは自分の非力な立場を、おとなしく従順に“受け入れ、黒人の中に運命的に置かれた白人にはならなかつた。この非対称性は人種を型にはめること（race typing）が劣等人種にのみ適用されるという非対称性

を示している。今日の個人主義の用語を使って自己を定義するときに、優等人種はより良き型 (a better type) とはいわず一般的な規範を用いる——普遍性 (万能) あるはいかなる型にも、またすべての型になりうる能力 (『マーク・トウェインの間抜けのウイルソン』11)。

すなわち優等人種が自分たちを「より良き型 (a better type)」と呼べば、それはすでに型を限定してしまうことになるが、そうではなくてかれらは普遍的能力であることを強調するのである。トウエインの『間抜けのウイルソン』が提示したのは、アメリカにおける非対称的な人種の存在である。アメリカ社会における「ニグロ」という人種が、いかにフィクションによって生まれ、したがってそれがいかに曖昧性を伴うものであるかを物語っている作品である。

劣等人種はあれこれの型と限定された範疇に入れられる。黒人英語、黒人の身なり、立ち居振舞いなど限定された特質である。トニ・モリスンが「レシタティブ」で使用した人種記号は結局のところ黒人の人種記号であり、白人の人種記号は「にいが嫌い」という価値表現でしかなかった。白人を含む記号になるとそれはすでに人種記号であることを止め階級記号になっている。

9 「レシタティブ」が提示するもの

「レシタティブ」が提示したテーマは、アメリカ社会の根源

的な問題を突いている。このアポリアが打開される見込みは今のところないだろう。今日のアメリカ文学とは白人と黒人の人種問題に収斂されるといえるほど、アメリカ植民地・アメリカ共和国、すなわちヨーロッパ人によって認識されたアメリカが建設されるとともに「黒人問題」は存在し続けている。かれらアフリカン・アメリカンたちが沈黙から脱け出て自己表現をすることが可能になってきた今、ようやくアメリカ文学における人種問題を検討する時代になってきたといえるのだろう。

「レシタティブ」はこのように、アメリカ社会における人種に関する認知不能の恐怖を問う作品であったが、同様に認知不能の恐怖を文学テーマにしたアメリカ文学作品はたくさんある。「パッシング」をテーマにしたネラ・ラーセンの『パッシング』や、認知不能と人種認識の曖昧性をテーマにしたケイト・シヨパンの短編『デジレの赤ん坊』などがその筆頭に挙げられる。

アメリカ人ではなくアフリカン・アメリカンという呼称が続くかぎり、アメリカ社会においてアメリカ市民である「黒い肌」の人々に対してそれが普遍的に使用されているかぎり、人種記号の非対称性、人種定義の非対称性が消滅することはない。真の意味での文化相対主義はまだ現実化していないのである。

引用文献

Michael Banton and Jonathan Harwood. *The Race Concept* (New York: Praeger),

1975.

- Andre Bleikasten. "The Closed Society and Its Subjects." Michael Millgate Ed. *New Essays on Light in August*, (Cambridge UP), 1987.
- The Black Public Sphere Collective Ed. *The Black Public Sphere*, (Chicago: U of Chicago P), 1995.
- Three Negro Classics*, (New York: Avon Books) 82. Booker T. Washington. *Up From Slavery*, 1999 [1965].
- William Faulkner. *Light in August*, (Harmondsworth: Penguin Books), 1967.
- Lucille P. Fultz. *Toni Morrison: Playing with Difference*, (Urbana and Chicago: U of Illinois P), 2003.
- Francis Galton. *Finger Prints*, (Amherst, New York: Prometheus Books), 2006.
- Suzan Gilman and Forrest G. Robinson, Ed. *Mark Twain's Pudd'nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture*, (Durham: Duke UP), 1990.
- David Theo Goldberg, Ed. *Anatomy of Racism*, (Minneapolis: U of Minnesota P), 1990.
- David Goldstein-Shirley. "Race / [Gender]: Toni Morrison's « Recitatif »", *Journal of the Short Story in English*, No. 27-Autumn, (Angers: Presses de l'Université d'Angers), 1996, pp.83-96.
- Thomas F. Gossett. *Race: The History of an Idea in America*, (Dallas: Southern Methodist UP), 1963.
- Susan Gubar. *Racechanges: White Skin, Black Face in American Culture*, (New York: Oxford UP), 1997.
- Thomas Jefferson. *Notes on the State of Virginia*, (New York: Penguin Classics), 1999.
- Toni Morrison. "Recitatif," Amiri Baraka & Amina Baraka Ed. *Confirmation: An Anthology of African American Women*, (New York: William Morrow & Co.), 1983.